

Ⅲ 授業研究会

第1回授業研究会

日 時 平成29年 6月19日 (月)
会 場 群馬県立伊勢崎商業高等学校
教科・科目 芸術科・音楽 I
題 材 名 イタリア語の歌曲を歌おう
指 導 学 級 情報処理科 3年7組
授 業 者 武井 康博 教諭



1 開会行事

(1) 授業説明 (武井教諭)

「Caro mio ben」を教材とした歌唱の授業について、いろいろなご意見を頂ければと思う。

教育課程について、本校は3年で音楽または書道の選択となっている。毎年書道を選択する生徒が多い。音楽の授業は、1人で歌を歌わなければいけなかったり、期末試験があったりといった安易な理由で避ける生徒もいる。1クラス40名のうち20名～30名ほど書道を選択することがほとんどである。今回観て頂くクラスの音楽選択者は12名ということで、とても少ない。しかし、生徒は音楽の授業を好きで選択しているので、意見交換も積極的にできる雰囲気がある。

1学期は歌唱の授業を中心に行っている。これまで校歌や教科書に載っているJ-POPなどを教材として扱ってきた。1、2年生では音楽の授業がなく、中学校の音楽の授業から2年間のブランクがあるので、歌唱の技術的なことをまずは確認するようにしている。また、それぞれの曲に込められた気持ちを感じ取って歌うことで、自身の思いや意図をもてるようにしている。

今回は生徒にとって初めて本格的な独唱を扱う題材となる。1人でイタリア歌曲を歌うということに抵抗を感じている生徒もいるようである。しかし、実際に楽曲の練習に取り組むようになると、興味・関心を増して休み時間に廊下等で歌っている姿も見られた。今回の授業は独唱ということで、生徒それぞれでの音楽表現を追求していくことを目標とする。最終的には独唱で表現できるように、その手段としてまずはグループ3人程度で歌い、それを聴いてお互いにコメントをし合う。その後、「今度はこういう風に歌おう」など考えられるように支援をしていく。

題材の第1時ではイタリア語の読み方、言葉のもつ響きを考えられるようにした。第2時では、テノール歌手の演奏を聴いて、特徴のある歌声を味わえるようにし、テンポ感や歌い方の違いをまとめた。そしてグループで歌い方の工夫を話し合った。本時は、歌詞と旋律との結び付きをまずは全体で考え、自分の表現の糸口を見出し、最終的には自分の表現したいこと等をまとめて、独唱で歌ってどのように変わったかを見取りたい。初めての題材ということで未知数などところがあるが、いろいろなご意見を頂きたい。

(2) 研究係より

授業前に研究係から、研究授業を観る「研究協議の視点」を提示しておき、授業研究でグループになった時にそれぞれのグループで1～2つの視点を選びながら協議をする。

「研究協議の視点」

- 本時の目標は達成できていたか
- 課題の質やレベルは適切であったか
- 評価の計画は適切であったか
- 主体的・協働的に取り組む展開・内容になっていたか

2 研究授業 指導案参照



3 授業研究

(1) 授業者より趣旨説明等（武井教諭）

今回観て頂いたクラスは人数が多い方であり、少ないクラスは8名である。日頃このクラスはおとなしい生徒が多く、商業5クラス、会計1クラス、情報1クラスということで、会計と情報は学力が高い生徒が多い。吹奏楽部に所属する生徒もいる。静かな雰囲気ではあるが、普段の授業でも声は出していて発言も多い方である。グループ活動などでは、リードして進行する生徒もいる。



これまでイタリア語の歌詞の発音やイタリア歌曲の発声法を学習してきた。それを踏まえた上で、楽譜からそれぞれの音楽を形づくっている要素の働きを感じ取って歌詞の内容と関わらせ、表現に生かしていくという展開を考えていたが、内容が盛り沢山過ぎて、授業で取り組む時間が足りなくなってしまった。

グループで歌う活動については、最初は声が出なかったが、次第に大きな声でも歌えるようになってきた。生徒が40人いるクラスであれば、もっとよい意味でガヤガヤしているので生徒も活動が行いやすいのかもしれない。ただ、生徒同士のコメントやアドバイスに関してははっきりできていた。振り返りのところでは、褒められて嬉しかったという意見が出ており、そうした意見が生徒の達成感に繋がっているようである。活動としては、お互いに聴き合って工夫するというところを行った。

楽譜を読みながら、旋律がどのような方向に向かっているかという部分に生徒が戸惑ってしまったようであった。歌詞の内容は考えやすいと思うが、それと音楽を形づくっている要素の働きとを関連させるという部分になるとなかなか難しいということを実感した。伴奏のリズムについても、途中からピアノを使いながら生徒を集めて指導をしたが、実際の音を聴くことで理解できるということがわかった。最終的には音楽を形づくっている要素の働きと歌詞の内容とを関わらせて、楽譜上にその効果を記入し、そこからイメージする色を付けて曲想の理解を深めて独唱の試験に向かえるようにしていきたい。

技術的な指導が厳しいと感じるところもある。音程が不安ということを訴える生徒もいたが指導に繋がらなかった。グループごとに活動をするので、伴奏がなくて生徒も取り組みにくい部分があったと思う。

(2) 研究協議

グループ協議及び発表

1班：住谷（前橋商業）、中畑（太田女子）、後藤（前橋南）、斎藤（沼田女子）

研究協議の視点：本時の目標は達成できていたか 課題の質やレベルは適切であったか

- ・それぞれの生徒が自分で考えて工夫することはできたが、実際に歌って自分で表現の効果や変化を受け取るところまでは難しかったように思う。
- ・取り扱う内容が多過ぎて、時間が足りないように感じた。
- ・表現活動を入れて、グループ活動によるフィードバックを交えながら進めることもできたと思う。
- ・歌唱の授業なので、意見を伝い合うことも大切だが、やはり歌う時間を増やす方がよい。
- ・グループごとにピアノの周りに生徒を集めて、先生の伴奏によってグループレッスンのような形をとるのもよいのではないかと。ピアノ伴奏の役割も大切だと感じた。
- ・旋律についての予備知識があったかどうかを見極めておくことが大切だったと思う。生徒はあまり理解していなかったように感じた。
- ・旋律線のもつ方向性、強弱等に時間をかけ過ぎたように思う。
- ・生徒は情緒的な意見を出すことに長けているようなので、歌詞の内容と関わらせて、考えを歌で表現する時間を多く設けるとよいのではないかとと思う。

2班：松平（尾瀬）、高木（伊勢崎清明）、鈴木（桐生南）、大小原（高高特支）

研究協議の視点：本時の目標は達成できていたか

- ・楽譜上で旋律の音符を線で結び、音程の上下を視覚化していたのは大変よかった。工夫を感じた。
- ・伴奏の比較（4分音符のリズムと8分音符のリズム）で音楽を形づくっている要素の働きを感じ取るのはとても有効だった。
- ・グループ内で意見を出し合い、それぞれの表現の活動に繋げていた。
- ・ワークシートは楽譜と一緒に1枚のシートにした方がよかった。生徒の視点が定まらないと感じた。
- ・それぞれの音楽表現の工夫まではいかなかったが、授業時間内に表現が変化してきた。
- ・音楽表現を引き出すもう一言の指導があると、さらに表現が変化すると思う。
- ・歌詞（単語）の意味の理解、解釈をもう少し掘り下げてほしい。
- ・本時の目標については「～感じ取る」までが適切であり、表現を工夫するには歌詞の読み込みを充分に行い、別の授業として計画し実行した方が、生徒のより心のこもった音楽表現に繋げることができるという結論に至った。

3班：井上（藤岡中央）、勝山（万場）、西田（赤城特支）、須田（渡良瀬特支）、川上（玉村）

研究協議の視点：課題の質やレベルは適切であったか

- ・授業の最初と最後では生徒の歌唱表現に違いが見られた。
- ・歌詞の内容との関わりを深める学習時間があるとよかった。
- ・目標を授業の要所で明確に伝え、達成するためにアドバイスや手立てなどの声掛けがあったらよい。
- ・本時で求めていた独唱、先生が言っていた演じる歌とはどのレベルだったのか？生徒には伝わっていないようだった。

→（武井教諭）姿勢もこだわりつつ、ベルカントの体の使い方を工夫するという設定だった。

- ・生徒間で発声の違いがあり、生徒同士でそれに気付いていたのか疑問に思った。
 - ・旋律の方向性、強弱、音色（イメージする色）と課題の目標が高い。1時間で全ての事をやろうとするのは時間が足りない。
 - ・各グループの意見や表現を全体で確認し、共有する時間があつたらよかった。
 - ・評価の観点を「演奏」にしたのは、ベルカント唱法が出来ているかどうかで評価するというのか？前半の観点は「演奏」、後半の観点は「関心・意欲・態度」の方がよいのではないか？
- （武井教諭）「関心・意欲・態度」の評価の方がよかった。表現が工夫できているかまでは授業で工夫できなかった。グループで積極的に意見を出しているかということの方が中心となった。
- ・生徒が授業に気持ちが向くように、生徒指導が行き届いている。
 - ・生徒がグループ活動に、意欲的・主体的に取り組めていたが、音取りの楽器があるとよかった。

4班：小川（利根商業）、野口（大間々）、藤嶋（関学附）、根岸（西邑楽）

研究協議の視点：課題の質やレベルは適切であったか

- ・グループ活動時の聴き合いを行う活動がよかった。
- ・音程が不安定な生徒もいたが、何かそれを補正する道具（楽器）やきっかけの音があつてもよかった。ただし、逆に何もなくて音程に固執せず、前時にやった姿勢や発音、呼吸法を意識できたかを観られてよかった。
- ・旋律線のもつ方向性や強弱、伴奏についてはもう少しヒントや手がかりがあつてもよかったのかもしれない。
- ・旋律の下行形の意味が分かってからは、歌詞の内容と音楽とが繋がっている生徒が多かった。
- ・生徒自身の言葉でワークシートを記入している生徒が多かった。
- ・どの活動においても、主体的に取り組んでいる生徒が多かった。
- ・全体的に、声がとても出ていたことや生徒の歌唱する姿勢がよかったことが印象的だった。
- ・部屋が広く、グループ活動を行うためには効果的に使いやすいと感じた。

5班：坂本（館林女子）、兒玉（高崎女子）、黒岩（高崎）、大谷（下仁田）、饗庭（市立太田）

研究協議の視点：主体的・協働的に取り組む展開・内容になっていたか

- ・この人数「だから」なのか、この人数「なのに」なのか分からないが、よく声が出ていて驚いた。
 - ・各グループで分かれて歌を聴き合い、話し合う場面で、本当はどのように各グループで進めて欲しかったのか？
- （武井教諭）個人が好きを選んで箇所を発表し、それについて意見を出し合ってもらいたかった。
- ・「この視点で活動を進めて」という指示があると、さらにグループ活動全体が弾んだかもしれない。
 - ・生徒主体にしてあつたので、ワークシートにもう少し細かく音楽を形づくっている要素が指定してあるとさらによかったのではないか。例えば強弱についてなど、生徒は少し混同しているようだった。
 - ・楽譜とプリントが一体になっているものの方が、活動がしやすいと感じた。
 - ・歌詞の内容について、授業の前半にもう少し扱う時間があつてもよかったかもしれない。
 - ・授業の始めのグループで聴き合うところをもう少し短縮すれば、歌詞の内容について深く取り上げる時間が取れたかもしれない。
 - ・自分の学校ではオーソレミオを扱っているが、「Caro mio ben」は生徒が自分を解放して表現するのが面白いと感じた。
 - ・全体的に、もっと沢山歌唱する時間をとつてもよかった。
 - ・旋律の上行、下行については、楽典をどこまで学習しているか分からないが、生徒は分かっているようであった。

- ・最後の歌唱では、ほとんどの生徒が強弱を付けて歌うことができているよかったです。
- ・強弱と歌詞の関わりを読み取らせてもよかったのではないかと感じた。
- ・最後は「こういう風に歌う！」というまとめの気持ちで歌ってみるとよかったかもしれない。
- ・「〇〇ができていない」等、自分たちで課題を見つけることができていたので、それを改善したバージョンで、意見が出された後すぐに歌ってもよかった。
- ・グループで活動することだけが協働学習ではない、ということも授業を観ながら改めて感じる事ができた。
- ・生徒が生き生きと学習に取り組んでいたのも、指導者からの声掛けがもっとあると生徒がより考えて取り組めたかもしれない。
- ・課題のレベルの設定は適切であったと感じた。

(3) 指導・助言等

① 島田 聡 先生 (群馬県教育委員会高校教育課指導主事)

授業説明で授業者から「歌い方がどう変化したかを見てほしい」という発言があったが、参観なさっていた先生方の印象としては、歌い方に変化を感じつつも、もっと変化できたのではないかと期待する意見が多いのではないかと。1時間の授業の最後に歌ったところでは、生徒は強弱、音色について歌い方を変え、全体に統一感が出てきた。その上で、もっと生徒の学びが深まるよう、音楽表現が変化する学習について先生方に先ほど協議して頂いた。

授業の導入で「世界に一つだけの花」を歌った時、Bメロに入った瞬間、声の質感が変わり音楽全体の雰囲気が変わった。このように音楽表現ができる生徒であるので、もっと本時の授業の中で生徒は変わったのではないかと。配布した中教審答申の「深い学びの視点」の3行目には「～知覚・感受したことを言葉や体の動きなどで表したり比較したり関連付けたりしながら、(中略)どのように音楽で表すかについて表現意図を持つこと」という文言がある。武井先生の意識付けによって、12名の生徒は様々なことを感じる事ができていたので、歌詞の内容と「音楽を形づくっている要素」との関わりについて理解し、表現意図を持って表現することもできたのではないかと。そのための提案を三点させていただく。

授業の展開部分で、「Caro mio ben」を歌った後「ステージに立ってライトを浴びて歌うんだよ」という声掛けに呼応したように、生徒がホセ・カレーラスの声を真似しようとしている様子が見られた。このような意欲的に、かつ楽しみながら学習する雰囲気の中、3人のグループで歌う際の意図的な「仕掛け」によって、さらに協働的に学びが深まるのではないかとというのが、一点目である。例えば1回目の歌唱は伴奏付きでリレー方式でフレーズごとに歌い、2回目は伴奏なしで自分が改善したいところや得意なところを選んで歌い、お互いにコメントし合う。おそらく2回歌唱したとしても5分程度であろう。その際、前時の学習内容(発声法や体の使い方)も含めて付箋に意見やアドバイスを書いてもらう。グループのメンバーは付箋を渡す時は、良い部分を必ず添えて説明をする。このような活動から、褒められると嬉しい、嬉しいからもっと工夫しようという循環が生まれる。

二点目は、旋律のもつ方向性を全体で考える際、歌詞の内容と組み合わせるとよかったのではないかと。この活動の時には黒板やホワイトボードを利用して、それぞれの歌詞がどういう意味で旋律の特徴を全員で共有するため、左側に歌詞の意味を、右側に下行形・上行形を板書していく。最初のストレッチで行ったように、手の上下で音の方向を表すのもよいが、今回取り上げたように旋律が長い場合は、最初のフレーズの前半と後半、次のフレーズの前半と後半というように分けるとよい。その際、旋律を比較しながら、旋律に合わせて手を動かし、生徒の「上がっている」「下がっている」という発言から下行形、上行形という言葉伝え、今後の授業の中でも使える知識を定着させることが重要である。そこで左側に書いてある歌詞と関連付け、さらに伴奏のリズムや強弱と関わらせていきたい。

旋律の方向性を考えた後、伴奏のリズムを変えて演奏したことは、「音楽を形づくっている要素」の知覚・感受のために非常に効果的な手立てであった。強弱についても同様に、要素の働きを変化させることで気付きを促したい。ただし、本日の授業の展開においては、旋律のもつ方向性や強弱、リズムについては、グループ活動と全体での学習のバランスをとる必要もあった。授業の後半（グループ活動）は音がほとんど無く、先生がリズムを変えて伴奏を弾き始めたところで生徒の歌が聞こえた。音とともに学習が進むよう、常に気を配る必要がある。

三点目として、本日の授業に限らず、本時の学習目標をどのように生徒と共有するかが重要で、主体的な学びを実現するためのポイントとなるということだ。生徒が学びに向かう姿勢を作る、つまり生徒と共に課題を設定するにはどうしたらよいのかということである。全員で歌った後に模範のカレーラスのCDを聴き、「みんなの演奏と何が違うの?」「カレーラスの声に近づける為には何が必要なのか?」という発問が必要となる。

本時の内容である旋律のもつ方向性を探るのであれば「ジョルダニーがこの旋律に込めた秘密を考えよう」という問いを提示することも生徒が主体的になる手立ての一つである。そうすることで、旋律と歌詞の内容が関連していることに生徒が気付く授業へと展開できる。

最後に、協働学習や対話的な学びと言われているが、単にグループ活動があればよいわけではない。グループで学ぶ必然性が学習課題にあるかどうかを点検してもらいたい。とりあえず4人で集まってやろう、というわけではなく、4人で集まらなければ解決できない学習課題や内容がそこにあるかどうかを考えてほしい。本日の授業にはグループで学ぶ必然性があったが、その必然性を教師も生徒も感じられる課題の設定方法や授業の展開を意識することが、今後の研究課題の1つと言えよう。

② 清田 和泉先生（群馬県高等学校教育研究会音楽部会副会長）

生徒が前向きに取り組んでいた。先生方の協議を聴いて、共感できる部分が多かった。授業の後半の部分で、音に触れる時間が少なくなっていたというのが第一印象である。

指導と評価の計画について、7時間扱いとされているが、これまでの学習の積み重ねが見えるようにしていってらよいかではないかと思う。今回の授業では板書は何もなかった。中学校3年生の音楽の授業では、板書や模造紙などが必ず取り扱われる。題材の第1次は意欲付けとなる。第2次では発声法について工夫を考える場面である。「この人どうやって歌っているのかな?」という問いが、第3次に生きていくこととなる。どのような体の使い方をしているのか、どのような声の出し方をしているのか、そこを真似していくということが学習なのではないだろうか。高校生といえども、板書などをもっと効果的に使い、視覚的に分かりやすい指導が必要である。

授業者からも授業で取り扱う内容が多かったということであったが、もっと絞り込んでよいと思った。教育芸術社の教科書には題材の目標が書かれている。大体の先生方がその目標を基にして授業を行っている。「イタリア語の言葉の響き」と一言でいっても具体的にはどのようなものなのか、例えばどのような響きの“ca”を出せばいいのか、「勸進帳」とは何が違うのか、などという手立てを考えることが必要である。全ての場所を工夫させるときりがないので、例えばこの3小節はどのような音色でどのような音量で歌うとよいか、などを考えることで表現の工夫に繋がっていくのではないだろうか。教科書の目標やねらいを参考にしながら検討してほしい。

生徒が勝手にやるのではなく、授業者が目標をもって指導を行わないと内容が散漫になってしまう。強弱に視点を当てるのか、速度に視点を当てるのか、生徒に着目してほしい観点を指導者もきちんと持ってほしい。音楽は技能・実技の教科なので、技能を身に付けることが必要である。技能を身に付け、考えながら表現の工夫に取り組めるようにすることが必要である。

③ 廣澤 秀伸 先生（群馬県高等学校教育研究会音楽部会長）

どこの学校でも、ステップアップサポート授業ということで授業改善に取り組んでいると思う。新商品は、そ

れを定着させるために出た当初は斡旋されるものである。あくまでもアクティブ・ラーニングは手法の話なので、その形態の方が必ずしもよいという訳ではない。様々な指導方法を、生徒の実態に合わせて取り混ぜながら行ってほしい。

本日の授業の流れや計画を見ると、学習評価の観点からは「思考・判断」の部分であると思う。そこにいきつくところの前提として、教材を示す時が一番の勝負所である。いかに食べたいと思わせるか、そこが教師の力の見せ所である。その時に、自分なりの解釈をもっておくことも必要である。例えば、この歌の主人公は男女どちらだろうか。歌詞の中で、相手を罵るようなことを言っているが、その前提にあるのは相手に対する片思いなのか、浮気なのか、などをスタート段階としつつ、そこが最も話し合いたいところでもある。

そこで楽曲のイメージをある程度統一させていくことが必要である。それがないと、様々な音楽表現が出てきてしまう。多数決で決めていく場合もあるので、クラスによって楽曲の解釈は異なることになるだろう。生徒が興味・関心をもてるようにし、その上でどう表現していくのが大切である。特に思考・判断の段階になった時に、生徒にクレッシェンドがついている部分の話をよくする。旋律が上行するところはクレッシェンドである。下行するところでもクレッシェンドがある。場面によってクレッシェンドの効果が変わる。このようなところで気付きができるようにし、あえて楽譜に書かれていないところのクレッシェンドやデクレッシェンドを考えるようにする。きちんと生徒に投げかけて、話し合いをする中で学習が深まっていく。

教師が引っ張る場面と話し合わせてアクティブに活動する場面を、使い分けることも必要である。知識として生徒に入れるべき所はしっかり入れ、講義形式で行ってよいと思う。そうすることで、学習内容が揺らぐことがなくなる。音楽の授業では、関心・意欲をいかに育てるのかというところが肝心である。そこが浅いと、知識・理解も定着せず、自分の考えも出てこない。いかに生徒が食いつくようなものをもってくるのが大切である。ぜひ、生徒が興味をもつようにし、その部分にエネルギーを注いでほしい。

生徒のアクティビティを高める授業をして頂いてよかった。

4 参加者 (敬称略 順不同)

廣澤 秀伸 (前橋西)	清田 和泉 (吾妻特支)	上田 裕信 (太田東)	島田 聡 (高校教育課)
朝倉 康雄 (前橋西)	黒岩 伸枝 (高崎)	野口 瑞穂 (大間々)	鈴木香奈子 (桐生南)
小川 唯佳 (利根商業)	武井 康博 (伊勢崎商業)	大小原美幸 (高高特支)	松平 康子 (尾瀬)
兒玉 理紗 (高崎女子)	斎藤真理奈 (沼田女子)	勝山 英城 (万場)	藤嶋 啓子 (関学附)
高木 佳子 (伊勢崎清明)	大谷 邦子 (下仁田)	西田えりか (赤城特支)	川上 寛子 (玉村)
住谷 伴 (前橋商業)	後藤 順子 (前橋南)	中畑 香映 (太田女子)	根岸 玲恵 (西邑楽)
須田 玲子 (渡良瀬特支)	井上 春美 (藤岡中央)	坂本 将 (館林女子)	

文責：坂本 将 (館林女子)

芸術科「音楽Ⅰ」学習指導案

平成29年6月19日(月) 第5校時(13:30~14:20)
群馬県立伊勢崎商業高等学校 視聴覚室(B棟3F)
情報処理科 3年7組 男子6名 女子7名 計13名
指導者 教諭 武井 康博

1 題材名「イタリア語の歌曲を歌おう」

○教材：「Caro mio ben」

補助教材：ワークシート

○学習指導要領の内容における位置付け

本題材は、学習指導要領芸術科「音楽Ⅰ」の「A表現」より

(1) 歌唱

ア 曲想を歌詞の内容や楽曲の背景とかかわらせて感じ取り、イメージをもって歌うこと。

イ 曲種に応じた発声の特徴を生かし、表現を工夫して歌うこと。

エ 音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感受して歌うこと。

を指導するものである。

2 題材の目標

(1) イタリア歌曲の発声の特徴を生かし、楽曲にふさわしい表現を工夫する。

(2) 曲想を歌詞の内容、音楽を形づくっている要素の働きから感じ取り、自分が表現したい音楽のイメージをもって独唱する。

3 題材の考察

(1) 題材設定の理由

歌唱は生徒たちにとって一番身近で親しみやすい活動で、歌を歌うことを楽しいと感じている生徒がほとんどである。多くの生徒は出身中学校で合唱コンクールを体験し、クラスで音楽を創り上げる喜び、達成感などを味わってきている。今回、初めて本格的な独唱に挑戦することで、一人一人が持っている音楽性を伸ばし、独唱表現の可能性に気付かせたい。

本題材では「イタリア語の歌曲を歌おう」としてイタリア歌曲を取り上げ、イタリア歌曲の魅力を味わうとともに、それらの雰囲気や醸し出しているイタリア語の響きと音楽を形づくっている要素の働きについて気付かせたい。また、発声法において、どのように身体を使ったらイタリア歌曲にふさわしい声が出せるか工夫させたい。イタリア語はそのほとんどがローマ字読みできるため、比較的発音しやすく、歌詞が表す心情も高校生にとって理解しやすいので、表現したい音楽のイメージをもって歌うのに適していると考えた。イタリア語の歌を歌えるようになったという達成感を味わうことで、今後、他の外国語の歌にも挑戦してみたいと思うきっかけになればと考え、本題材を設定した。

(2) 生徒の実態

ア 音楽への関心・意欲・態度

商業高校である本校では、教育課程編成の都合上、芸術科の履修については3年次で「音楽Ⅰ」と「書道Ⅰ」のいずれかを選択必修することとなっている。「音楽Ⅰ」は少人数ながら、音楽に興味・関心のある生徒が集まっている。このクラスは全体的には大人しい雰囲気であるが、表現の学習に対する意識は非常に高く、学年の中で一番大きな声を出して歌うクラスである。男女ともに授業をリードする生徒がいて、積極的な発言も見られる。

イ 音楽表現の創意工夫

歌詞の内容や「音楽を形づくっている要素」の働きから曲想を感じ取り、イメージをもって主体的に音楽表現を工夫することができる。「音楽を形づくっている要素」の中で「強弱」は知覚しやすく、音楽表現の幅を広げている。一方「音色」をイメージし、表現することに関しては苦手意識をもっている生徒もいる。

ウ 音楽表現の技能

「音楽を形づくっている要素」の働きから曲想を感じ取り、表現するための高い歌唱力を持っている。歌う時の姿勢、言葉の発音などにもう少し気を使えとさらに良くなると思う。

(3) 教材選択の理由

「Caro mio ben」は「音楽Ⅰ」の教科書に広く採用されているイタリア古典歌曲であり、その美しく流れるような旋律、情熱的な曲想が特徴の楽曲である。愛する女性に対して自分のことを思っただけの花「夏の思い出」の歌唱を通して、姿勢、呼吸法など歌唱の基礎的技術を学習し、響きのある歌声を目指してきた。また、音楽を形づくっている要素の「旋律」「リズム」「強弱」「音色」の働きが生み出す雰囲気を感知し、自分なりのイメージをもって歌ってきた。

(4) 題材の系統と他教材との関連

イタリア歌曲の独唱は本題材が初めての取り組みになる。これまで「校歌」「ひまわりの約束」「世界に一つだけの花」「夏の思い出」の歌唱を通して、姿勢、呼吸法など歌唱の基礎的技術を学習し、響きのある歌声を目指してきた。また、音楽を形づくっている要素の「旋律」「リズム」「強弱」「音色」の働きが生み出す雰囲気を感知し、自分なりのイメージをもって歌ってきた。

4 題材の評価規準

観点	観点1 音楽への関心・意欲・態度	観点2 音楽表現の創意工夫	観点3 音楽表現の技能
歌唱	①曲想と歌詞の内容や楽曲の背景との関わりに関心を持ち、イメージをもって歌う学習に主体的に取り組もうとしている。 ②曲種に応じた発声の特徴に関心を持ち、それらを生かして歌う学習に主体的に取り組もうとしている。	①音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気などを感受しながら、曲想を歌詞の内容や楽曲の背景と関わらせて感じ取り、音楽表現を工夫し、どのように歌うかについて表現意図をもっている。	①曲想を歌詞の内容や楽曲の背景と関わらせて感じ取り、イメージをもって音楽表現をするために必要な歌唱の技能を身に付け、創造的に表している。 ②曲種に応じた発声の特徴を生かした音楽表現をするために必要な歌唱の技能を身に付け、創造的に表している。

5 指導と評価の計画（7時間）

次	時	○学習のねらい・学習活動	題材の評価規準との関連	評価方法
1	1 2	○イタリア語の特徴を感じながら「Caro mio ben」を歌えるようにする。 ・「Caro mio ben」の範唱CDを聴く。 ・イタリア語の歌詞を読み、リズム唱を行う。	観点1-①	【観察】 【演奏】 【発言】
		・「Caro mio ben」をイタリア語で歌唱する。 ・イタリア語のもつ響き、発音上の特徴について考える。		
2	3 4	○イタリア歌曲にふさわしい発声法について工夫する。 ・2人のテノール歌手による「Caro mio ben」の演奏を聴き、それぞれの歌手の発声法や表現方法の特徴をワークシートにまとめる。 ・楽曲にふさわしい歌い方（姿勢・呼吸法など）について、個人やグループで試しながら意見を出し合い、クラス全体で共有する。 ・クラス全体で共有した発声法に基づいて「Caro mio ben」を歌う。 ・グループで互いの歌を聴き合い、コメントをする。	観点1-② 観点3-②	【観察】 【ワークシート】 【発言】 【演奏】
		○「Caro mio ben」の音楽を形づくっている要素（旋律、リズム、強弱）を知覚し、それらの働きを感受して曲想を歌詞の内容と関らせて感じ取り、音楽表現を工夫する。 ・歌詞の内容について自分なりの解釈をワークシートにまとめる。 ・旋律線のもつ方向性、強弱、伴奏のリズムの変化と歌詞の内容との結び付きについて考え、ワークシートにまとめる。 ・楽譜に自分の表現意図、フレーズからイメージする色を書き込む。 ・グループで互いの歌を聴き合い、コメントをする活動をとおして、歌詞の内容と音楽を形づくっている要素の働きを関連付けて歌えるようにする。	観点1-① 観点2-①	【観察】 【ワークシート】 【演奏】
3	5 6 7	○自分が表現したい音楽のイメージをもって独唱する。 ・グループで互いの歌を聴き合い、コメントをする。 ・本時までの学習内容を生かして「Caro mio ben」を歌う。	観点3-① 観点3-②	【観察】 【演奏】

6 指導方針

本題材では、イタリア歌曲の発声法を追求し、曲想を歌詞の内容、「音楽を形づくっている要素」の働きから感じ取り、自分の表現意図をもって独唱することを目標にしている。発声法については、テノール歌手の演奏を参考に、呼吸法、姿勢や身体の使い方などを身に付け、イタリア歌曲にふさわしい発声で歌えるように工夫させたい。歌詞の内容は生徒が興味を示す内容だと考えるので、自分なりの解釈を深め、思いを込めて歌唱表現をさせたい。また、旋律線のもつ方向性、強弱、伴奏のリズムと歌詞の内容との関わりについて考えさせ、音楽表現

を工夫させたい。6月末に独唱発表の形で試験を実施し、学習状況を評価する。

7 本時の学習

(1) 本時の目標

- ・曲想を歌詞の内容、「音楽を形づくっている要素」と関らせて感じ取り、音楽表現を工夫する。

(2) 本時の学習（本時は7時間抜きの5時間目）

	時 間	○学習のねらい ・生徒の学習活動	教師の働きかけおよび指導上の留意点 ◆学習活動における評価規準【評価方法】 ◎Aと判断する場合のキーワード △Cと判断される生徒への支援・働きかけ
導 入	10 分	○本時の目標を理解する。 ・ストレッチ ・校歌 ・しゃくなげ	・本時の目標を伝え、学習活動への意欲を高めさせる。 ・体に余分な力が入らないようにほぐす。 ・呼吸や姿勢、口の開け方に留意し、豊かに響く
展 開	30 分	○前時を振り返り、発声法を意識しながら歌う。 ・「Caro mio ben」を全体で歌う。 ○互いに演奏を聴き、コメントをすることで自分自身の演奏について客観的に振り返る。 ・グループで互いに歌を聴き合う。 ○旋律線のもつ方向性、強弱、伴奏のリズムと歌詞の内容との関わり及びそれらを生かした音楽表現の方法について考える。 ・旋律線のもつ方向性についてはすべてのグループ共通で考え、強弱、伴奏のリズムについては2グループずつ分担して考える。 ・楽譜に自分の表現意図、フレーズからイメージする色を書き込む。 ・グループごとに発表し全体で共有する。	◆観点3-②【演奏】 ・姿勢や体の使い方、呼吸の仕方等に注目させる。 ・美しい声、豊かに響く声を意識させる。 ・イタリア語の発音に留意させる。 ◎ベルカントの発声を意識し、姿勢、呼吸法など身体の使い方を工夫して歌っている。 △姿勢、呼吸法、発音等について個別に支援する。 ・自分の好きなフレーズを選んで歌わせる。 ・お互いに良かった点、改善点を助言し合う。 ◆観点2-①【観察】【ワークシート】 ・旋律線のもつ方向性についてはクラス全体で考える。 ・グループで歌いながら考えさせる。 ・グループ活動が円滑に進んでいるか確認し、必要に応じて助言する。 ◎旋律、強弱、リズムなどの「音楽を形づくっている要素」の働きが生み出す雰囲気と、歌詞の内容との関わりを考えることができる。 △旋律、強弱、リズムなどの「音楽を形づくっている要素」の働きに気付かせる。
ま と め	10 分	○本時の目標が達成できたか確認する。 ・「Caro mio ben」を全体で歌う。 ・自己評価シートの記入 ・次時の活動の確認	・イメージしたことを表現につなげるよう意識させる。